ゆずりはの森から

第184号
2018年10月1日発行

NPO法人
ゆずりは学園

小学生
中学生
高校生
大学生
社会人

＊感想文のご紹介＊

中日新聞掲載記事「もしもし 天国の君へ」に寄せて

記事を読んでホロリとしました。パパさんとママさんの愛が詰まってました。（Kさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

こんばんは。記事みました。今度帰省する時があったら、寄りたいです。（Wさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

自分が彼女の分まで生きる、とは言えないですけども、ゆずりは学園の卒業生みんなで彼女の分、しっかりと生きていきたいですね。（Hさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今日は新聞を届けていただきありがとうございました。

今頃、あの子が部屋で新聞を見ています。そして数年でも居場所があったこと、気持ちを分かろうとしてくれたパパママ先生に出会えたことに深く感謝していると思います。あの時、ゆずりは学園がなかったら、多分、私が今、引きこもる人生だったかもしれませんね。（Oさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ご連絡くださいまして、ありがとうございます。せっかくのお話をいただきながら、ご案内いただきました記事は、インターネットを通して読むことができました。多くの子どもたちがみなさまの下で救われたことが改めて分かりました。不登校問題は折に触れて取材しています。今後、ご協力をお願いすることがあるかもしれません。（Sさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

お元気でお過ごしでしょうか？

今年も、もう秋の便りの時期になり、また、ぐるりんバスの廃止から3年にもなるのですね。まだ、戻るかもとのお話ですが、復活路線になってほしいです。要望がとどいたのでしょうか？ゆずりは学園に通っている子ども達の為に願わずにはいられません。

潮風の電話…Ｗｅｂで読ませて頂きました。思いがあふれている記事で、胸がいっぱいになりました。ご夫婦の写真も掲載されていたので、お二人のお顔が見れて、ほっこりした気持ちになりました。（Sさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「潮風の電話」を設置されたんですね!! また見に行きたいと思います。（Tさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

お世話になります。中日新聞、ウェブで拝見しました。電話もとてもロケーションが良い所にありますね！

苦しいときに、誰かに話しかけたくなる気持ちはとても分かります。自分自身の気持ちをはける場所がどこかにあるだけでも救われますよね。

いじめは、毎日詳細にメモを取るということも今回勉強になりました。先日ある取材先から聞いたところ、パワハラやセクハラの被害に遭った場合も、詳細にメモを取ることが推奨されているようです。（Sさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

お世話になっております。

記事、拝見しました。そんな電話ボックスがあったのですね。なんとも言えない深い記事でした。（Sさん）

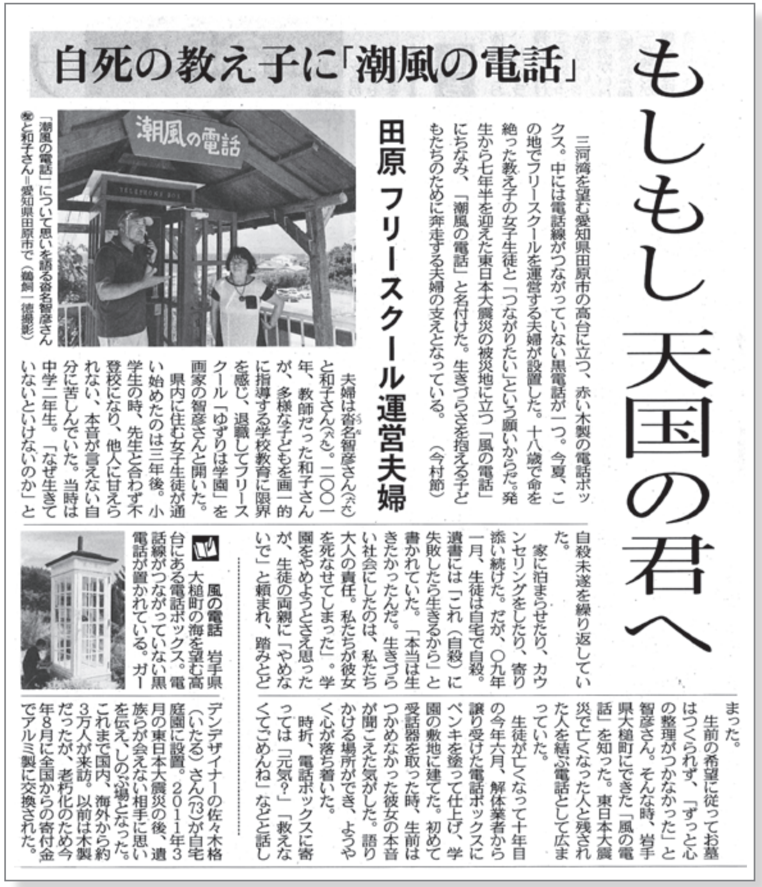
＊＊＊＊＊＊＊＊＊

中日新聞、一面をしっかり読ませていただきました。ご夫妻のいつもながらの健闘ぶりには、頭が下がります。大変なことの連続だと思いますが、体には充分気をつけて頑張って下さい。遠くから声援を送るのみで申し訳ないです。（Oさん）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今アトランタで医学部の試験勉強を毎日必死に続けています。ネットで読みました。こういう記事が掲載されてこそ、日本は教育制度を少しずつ考え直さないといけないですね。英字新聞に掲載されるということもすごいことです。僕もいつもネットで読んでいます。（アメリカ Nさん）

中日新聞（9月11日 夕刊）



もしもし 天国の君へ

自死の教え子に「潮風の電話」

田原 フリースクール運営夫婦

三河湾を望む愛知県田原市の高台に立つ、赤い木製の電話ボックス。中には電話線がつながっていない黒電話が一つ。今夏、この地でフリースクールを運営する夫婦が設置した。十八歳で命を絶った教え子の女子生徒と「つながりたい」という願いからだ。発生から七年半を迎えた東日本大震災の被災地に立つ「風の電話」にちなみ、「潮風の電話」と名付けた。生きづらさを抱える子どもたちのために奔走する夫婦の支えとなっている。（今村節）

「潮風の電話」について思いを語る沓名智彦さん㊨と和子さん＝愛知県田原市で（鵜飼一徳撮影）

夫婦は沓名智彦さん（六六）と和子さん（六九）。二〇〇一年、教師だった和子さんが、多様な子どもを画一的に指導する学校教育に限界を感じ、退職してフリースクール「ゆずりは学園」を画家の智彦さんと開いた。

県内に住む女子生徒が通い始めたのは三年後。小学生の時、先生と合わず不登校になり、他人に甘えられない、本音が言えない自分に苦しんでいた。当時は中学二年生。「なぜ生きていないといけないのか」と自殺未遂を繰り返していた。

家に泊まらせたり、カウンセリングをしたり、寄り添い続けた。だが、〇九年一月、生徒は自宅で自殺。遺書には「これ（自殺）に失敗したら生きるから」と書かれていた。「本当は生きたかったんだ。生きづらい社会にしたのは、私たち大人の責任。私たちが彼女を死なせてしまった」。学園をやめようとさえ思ったが、生徒の両親に「やめないで」と頼まれ、踏みとどまった。

生前の希望に従ってお墓はつくられず、「ずっと心の整理がつかなかった」と智彦さん。そんな時、岩手県大槌町にできた「風の電話」を知った。東日本大震災で亡くなった人と残された人を結ぶ電話として広まっていた。

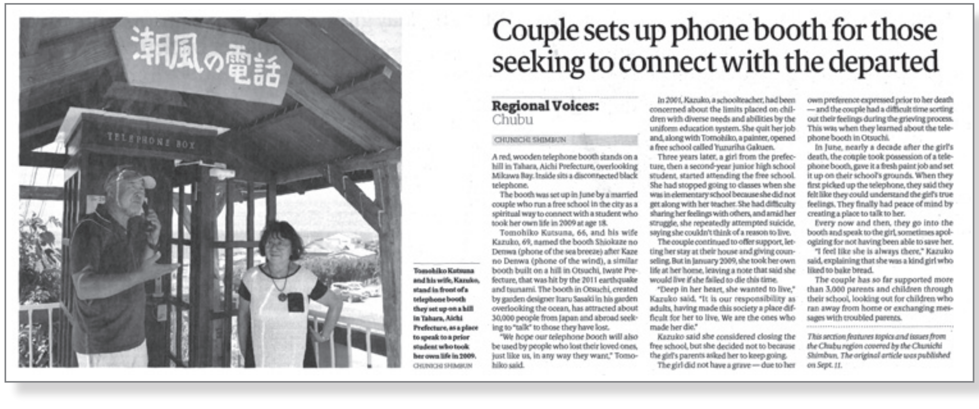
生徒が亡くなって十年目の今年六月、解体業者から譲り受けた電話ボックスにペンキを塗って仕上げ、学園の敷地に建てた。初めて受話器を取った時、生前はつかめなかった彼女の本音が聞こえた気がした。語りかける場所ができ、ようやく心が落ち着いた。

時折、電話ボックスに寄っては「元気？」「救えなくてごめんね」などと話し

風の電話 岩手県大槌町の海を望む高台にある電話ボックス。電話線がつながっていない黒電話が置かれている。ガーデンデザイナーの佐々木格（いたる）さん（73）が自宅庭園に設置。2011年3月の東日本大震災の後、遺族らが会えない相手に思いを伝え、しのぶ場となった。これまで国内、海外から約3万人が来訪。以前は木製だったが、老朽化のため今年8月に全国からの寄付金でアルミ製に交換された。

the japan timesにも掲載されました！

the japan times（9月25日）



Couple sets up phone booth for those seeking to connect with the departed

Regional Voices:
Chubu

CHUNICHI SHIMBUN

A red, wooden telephone booth stands on a hill in Tahara, Aichi Prefecture, overlooking Mikawa Bay. Inside sits a disconnected black telephone.

The booth was set up in June by a married couple who run a free school in the city as a spiritual way to connect with a student who took her own life in 2009 at age 18.

Tomohiko Kutsuna, 66, and his wife Kazuko, 69, named the booth Shiokaze no Denwa (phone of the sea breeze) after Kaze no Denwa (phone of the wind), a similar booth built on a hill in Otsuchi, Iwate Prefecture, that was hit by the 2011 earthquake and tsunami. The booth in Otsuchi, created by garden designer Itaru Sasaki in his garden overlooking the ocean, has attracted about 30,000 people from Japan and abroad seeking to "talk" to those they have lost.

"We hope our telephone booth will also be used by people who lost their loved ones, just like us, in any way they want," Tomohiko said.

In 2001, Kazuko, a schoolteacher, had been concerned about the limits placed on children with diverse needs and abilities by the uniform education system. She quit her job and, along with Tomohiko, a painter, opened a free school called Yuzuriha Gakuen.

Three years later, a girl from the prefecture, then a second-year junior high school student, started attending the free school. She had stopped going to classes when she was in elementary school because she did not get along with her teacher. She had difficulty sharing her feelings with others, and amid her struggle, she repeatedly attempted suicide, saying she couldn't think of a reason to live.

The couple continued to offer support, letting her stay at their house and giving counseling. But in January 2009, she took her own life at her home, leaving a note that said she would live if she failed to die this time.

"Deep in her heart, she wanted to live," Kazuko said. "It is our responsibility as adults, having made this society a place difficult for her to live. We are the ones who made her die."

Kazuko said she considered closing the free school, but she decided not to because the girl's parents asked her to keep going.

The girl did not have a grave — due to her own preference expressed prior to her death — and the couple had a difficult time sorting out their feelings during the grieving process. This was when they learned about the telephone booth in Otsuchi.

In June, nearly a decade after the girl's death, the couple took possession of a telephone booth, gave it a fresh paint job and set it up on their school's grounds. When they first picked up the telephone, they said they felt like they could understand the girl's true feelings. They finally had peace of mind by creating a place to talk to her.

Every now and then, they go into the booth and speak to the girl, sometimes apologizing for not having been able to save her.

"I feel like she is always there," Kazuko said, explaining that she was a kind girl who liked to bake bread.

The couple has so far supported more than 3,000 parents and children through their school, looking out for children who ran away from home or exchanging messages with troubled parents.

This section features topics and issues from the Chubu region covered by the Chunichi Shimbun. The original article was published on Sept. 11.

Tomohiko Kutsuna and his wife, Kazuko, stand in front of a telephone booth they set up on a hill in Tahara, Aichi Prefecture, as a place to speak to a prior student who took her own life in 2009. CHUNICHI SHIMBUN

お知らせ

自閉症・アスペルガー等の「発達障害」の子を持つ親の会

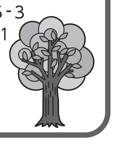
ゆずりはの会（197回）

○日時／11月9日（金） PM1:30～3:00
○場所／ゆずりは学園
（毎月第2金曜日 12/14・2/8・3/17）

お問い合せ・連絡先

ゆずりは学園事務局

〒441-3421 田原市田原町池の原15-3
TEL:0531(22)3515 FAX:0531(22)7761
e-mail:kutsuna_ike@yahoo.co.jp
http://www.yuzuriha-gakuen.com/
http://ameblo.jp/yuzurihaschool/
http://ameblo.jp/kutsuna-diary/



募集 NPO法人 ゆずりは学園 **会員希望者**

●賛助会員／年会費2,000円
●正 会 員／年会費5,000円
●寄　　付／自由

銀行
三菱東京UFJ銀行（普）田原支店
口座名義／ゆずりは学園　理事　沓名智彦
口座番号／3627714

郵便局
口座名義／特定非営利活動法人
　　　　　ゆずりは学園
口座番号／00870-6-136039

お便りを郵送します。お名前・ご住所をご連絡ください。